

ふみの会 ニュース

■発行 ふみの会広報部
 ■発行日 2006年1月31日
 ■連絡先 藤川博樹
 〒115-0045
 北区赤羽1-48-3ドミール藤203
 tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
 ■編集 中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>
<mailto:fumi@mdn.ne.jp>

No.290

2月行事日程

■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
 ワード、一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
 エッセイ:5枚(2000字)
 小説:10枚(4000字)目安

■原稿締切 2月17日(金)16:00

■会費

年間1200円(80切手×15)

■郵送料カンパお願いします。



◆この日が誕生日のクリスティーナさんとすごいインテリだったその夫。
 (中は直樹)ガラパゴス諸島サンタクルス島のジャングルで合同キャンプしながら手作りハウスを作っていたグループ。
 2001年8月

ブックレビュー

フィリパ・ピアス

「トムは真夜中の庭で」

高杉一郎訳・岩波少年文庫

子どもの本にしては、けっこう長いもので、以前二度ほど読みかけて挫折している。忙しい現代では、ついつい目先の面白い本、必要に迫られた本を読んでも、いまがだが、今回通読して、いろいろ考えさせられた。

主人公トムは弟がはしかにかかったため、夏休み中親戚の家に預けられる。そして夜中に家の裏にある庭を冒険する話である。そう思ったいきさつ、一階のホールにあるいわくありげな大時計、庭の描写など、大変詳しく書かれている。この部分で、気の短い読者は飽きてしまうかもしれない。今の児童文学では、すぐに面白い話に入っていないかと、読者はついでこないだろう。

描写が、こまかく論理的で、非常に詳しいのである。こういう息の長い論理的な文章を追っていくのは西欧人は得意なのだろうか。日本的な省略の仕方、花鳥風月的な余白の文章からかけ離れているので、日本人の体質にあわないのかもしれない。しかし、我慢して途中まで読んでいくとすべての細部の構成ができてくるのがわかる。構成上の論理的な必然があり、細部が丹念にリアリズムで描かれたからこそ、後半が盛り上がるのである。ドラゴンやトロールが出てこなくてもファンタジー小説は書ける。細部がリアリズムで固められたファンタジー小説なのである。

そして、丹念に最後まで読み通したとき、トムが真夜中の庭で会ったハティとは誰であったのかを我々は忽然と理解する。そして歴史の中で生き、死んでいく人間というものの存在と、そのはるかなる思いに読者は共感し感動するのである。

私はこの本を最後まで読んで、イギリス戦後児童文学の最高傑作といわれている意味をよく理解したのである。(F)

トムは真夜中の庭で



短編童話 冬の星 蒲原ユミ子

大晦日。

灰色の空から雪が舞いおりてくる。

赤いコートを着た千陽がぶんぶん

おこりながら歩いている。

(大変なことは、いつもあたしにやらせるんだから！)

手にはずしりと重い買い物袋を下

げて。中に、しょう油・油揚げ・ちく

わ・ごぼう・人参などが入っている。

正月の雑煮の具である。お母さんは

きょうまで仕事だったので、買い物

に手がまわらなかつたのだ。

家には、中学生のヒロシがいるが、

ヒロシは仕事を頼まれそうになると、

なぜか頭がいたくなったり便所に入

ったりする。それで、その仕事は千

陽にまわってくる。きょうは珍しく

ヒロシも風呂そうじをさせられてい

たけれど。

ふだんからお使いやトイレそうじ

や台所の洗い物などは、千陽の仕事

と決まっているし、母は、なにかと

千陽を重宝してきつつかう。

「千陽みたいに丈夫でよくはたらく

娘は、将来きつと幸せになれるよ」

が、母の口ぐせだ。

まあ、6年生の千陽はヒロシより

ご飯もたくさん食べるし、背も体重

もヒロシとそう変わらない。中学生

とまちがわれることはしよつちゆう

である。

それにしても、大晦日の夕方にな

つてからの買い物はひどい。腕の筋

肉がみしみし痛くなるほど重い。

除雪車も通つただけれど、今は

その上を数十センチの雪が積もつて

いるので、道は人ひとりが通れるだ

けの1本道になっている。車は除雪

車か四輪駆動くらいしか走れないだ
ろう。

冬場は大体こんなものだけれど、

今年の雪は早くやって来た。

千陽は立ち止まり、ふうつと息を

ついた。それから荷物の手を持ちか

えた。

ゴオーツ

風が出てきた。雪がひらひらと斜

めにまわっていく。

ゴゴゴオ

空中が大きなコマのようにうずま

いてきた。千陽は吹雪にはなれてい

るけれど、うす闇がかつてきたので

少し心細くなつてきた。もう少し行

かないと人家もない。雪道を踏み外

さないように一歩一歩しんちように

歩いた。

ゴゴゴオオ

風がうなり、雪が横なぐりに吹き

つけてくる。1メートル先も見えな

くなつてきた。千陽は口を固く結び、

少し前かがみになり、頭で吹雪のさ

け目を突つ切るようにして進んだ。

ズボツ！ 右足がズズツと沈んだ。

雪道を踏み外してしまった。長靴

とズボンの間に雪が入つたようだ。

千陽は荷物を雪の上に置き、片足立

ちになつて雪が入つたほうの長靴を

脱いだ。白い雪の固まりがころころ

つと出た。そのまま履いていたら、

家に着くまでに溶けて足が冷たくな

つてしまふところだつた。

靴下だけになつた足にも吹雪は容

赦なく吹きつける。千陽はささつと

それをはらい、すばやく長靴をはい

た。

ゴゴゴオツ

グワオオツ

空じゅうがうなり、雪が細切れに

吹き飛び、渦巻いている。

千陽は雪といつしよに空にぐんぐ

ん浮かび上がつていけそうな気がし

た。風の流れに乗って鳶のようにゆ

うゆうと空を舞えそうな・・

雪の精のように空をふわんふわん

ひゅうひゅう飛べたらどんなにおも

しろいだろう。町までなんてひと飛び、海辺までもすいすい！ 地球中をめくりたいわ！

宇宙まで飛んで星から星をまわれば、すごいなあ・・

ああ、現実には千陽の手にはずしりと重い買い物袋があり、空どころか前に進むのも大変。手はかじかんで感覚がなくなってきたけれど、背中にはぼつぼつと汗をかいてきた。

ふうっとため息をついてから顔を上げた。

(あれ?)

千陽は不安になった。吹雪で遠くは見えないけれど、もう見えてもいはいはずのポンプ小屋がない。

(道をまちがえちゃったかしら?)

これまで歩いてきた道のとちゅうによその村に行く道もあるが、店から家まで通いなれた道だ。それを、空想にふけっている間にまちがえちゃったのだろうか。

千陽は立ち止まった。

前後も数メートル先が見えない。うす闇もしのびよって来ている。千陽はぞつとした。

(吹雪の中、迷って凍死しちゃうのかしら)

吹雪の夜、遠くの実家から下宿にもどって来る若い女の先生が、吹雪のため道を迷って凍死してしまった話を、千陽は何度も母から聞いている。この道ではなく、もう少し吹きさらしの場所だけだ。

千陽はふらつとへたりこみそうになった。荷物といっしょに小さくしやがみこんだ。雪が頭の上を通りすぎた。

しばらくたった。

風のうなりは少し遠くなったけれど、あいかわらず吹雪が舞っている。そつと千陽が亀の子のように顔を上げた。向こうの空に金色の星が見えた。

(えっ?)

吹雪の中で星が見えるはずはないけれど、金色の星はゆっくりおりて

千陽の方にやって来る。

千陽は思わず立ち上がった。

それは星ではなく、女の人だった。

しかも千陽が、

(雪の女王かしら?)

と思ったほど、凜として美しい人だった。

登山者のように額に明るいうらみをつけている。天から舞い降りたように、吹雪をものともせず軽やかにこちらに向かってくる。

細い一本道なので、千陽は片足を雪に踏み出して女の人に道をゆずった。

女の人は嬉しそうにこつと笑い、美しい笑顔で千陽をまっすぐ見た。力強い瞳だった。千陽も思わずうなずいた。

女の人はデイパックを背負い、しっかりと足取りで遠ざかっていく。

千陽に、急に元気がわいて来た。

荷物を持ちなおし、一步一步と歩き

始めた。

すぐ先に、ポンプ小屋が見えてきた。向こうに、人家の明かりも見える。千陽の家までもうちよつとだ。

千陽はキシキシとリズムよく雪を踏みながら思った。

(今ごろ、お母さんは必死で大晦日のごちそうを作っているだろうな。わたしの大好きな鳥のから揚げの用意もしていたし・・)

千陽はの口の中がじゅわつとなつた。足取り軽く家に急いだ。

エッセイ

文庫本

中井 豊

初めて読んだ文庫本は創元推理文庫の確か『シャーロック・ホームズの帰還』だった。小学五年生の正月、伯父にもらった小遣いを手に従弟と本屋へ出かけて買った。面白かったと同時に、文庫本を読み通したという満足があった。

中学生二年生になって、社会科の安川富春先生にロバート・マルサスの『人口の原理』(岩波文庫)を勧められ、注文した。何か『哲学の本』を読みたいと言ったように思う。それで、先生が選んでくれた本だった。これは初期の経済学の本だ。要するに、人口は等比数列、食糧生産は等差数列になることから社

会問題が発生するということが書いてあったように思う。頻繁に登場する「幾何級数」「算術級数」という言葉は知らなかったが、何となく分かった気がした。しかし、三分の一位で投げ出した。一方で、角川文庫の菊池寛『恩讐の彼方に』、武者小路実篤『友情』『愛と死』などは面白く読めた。

その頃、親しかった池田志都雄君は『ガモフ全集』(白揚社)や『寺田寅彦全集』(岩波書店)を揃え、どんどん読んでいた様子だった。内容について聞いた覚えはないが、彼にもらった『ジョセフ・ピューリツァー』(ラダー・エディション)という易しい英

語の本を私が読み通したのは三十歳になる前で、それまで読まれた形跡はなかったから、彼も背伸びしていたかも知れない。しかし、銀行支店長の息子だった彼には、レコードを聴くことや、ツケで本を買うことを学んだ。

この中学校では前川繁夫先生が理科と英語を教えておられた。休憩時間に教員室の机で英語かドイツ語かフランス語の新聞をいつも読んでいた先生だった。通信教育で経済学を勉強されていたが、試験監督の際には分厚い岩波文庫を孜孜として読みまわっていた。私が転校する時、お宅へ伺うと、沢山の岩波文庫や古書店で揃えたという

『エンサイクロペディア・ブリタニカ(大英百科事典)』を整然と並べた書棚を背に、持参した岩波文庫目録で選んでもらうと、プラトンやカントやドストエフスキーやトルストイやマルクスなど多数の著作に丸印をつけ、「三十歳までに読むといい」と言われた。今思うと、先生の当時の年頃である。

アリストテレスの『形而上学』(岩波文庫)を嚙ったのは中学三年生の時だった。これも、ほんの少し読んで折した。哲学はいかに尊いか、というようなことから始まっていくと記憶しているが、わくわくする内容では全くなかった。むしろ、新刊の遠

親しめる本があった。装丁を揃えたかったので、新潮文庫にはほとんど手を出さなかった。小林秀雄が角川文庫の宣伝文に「雑多な本が入っていてよい」というようなことを書いていた。自身の本が岩

藤周作『わたしは捨てた女』、柴田翔『されど我が日々』などが面白かった。これらは単行本だった。

高校生になってからも、岩波文庫でショーペンハウエルやヘーゲルやデカルトやベルグソンの薄い本を買ってみたが、とても読めなかった。『西田幾多郎全集』（岩波書店）に収められた随筆（論文は分かるような分からないような文だった）はいくら

か読めた。それで、訳文の日本語のせいにして、哲学者の随筆はともかく、哲学の本は読まなくなってしまった。

角川文庫には中高生にも

波文庫に入っていないからだろうとは思ったが、同感だった。

高校を卒業する前後に講談社文庫というのが発刊された。中公文庫も現れた。その後、ちくま文庫・文春文庫などが刊行された。

いつしか前川先生の助言を忘れ、三十歳を過ぎ、『モンテ・クリスト伯』を読んだのが、岩波文庫を見直すことになった。このドラマティックで通俗的な本は面白かった。

それ以来、外国語を勉強してから原語で読むべきだという夢を諦める年齢になった気がしたことも作用して、通勤電車で常識的な外国

文学の名作を岩波文庫で少しずつ読んだ。もちろん、遠藤周作・松本清張・森村誠一・山本周五郎・五味川純平・山崎豊子・北杜夫・新田

次郎・司馬遼太郎・吉村昭といったサラリーマン向け（？）の角川・新潮・講談社・文春などの文庫も通勤電車で何冊も読んだ。

長い間、ほとんど文庫本ばかり読み、いつしか大抵の作品を文庫本でしか読まない習慣がついてしまった。しかし、娘に借りた単行本の横山秀夫『クライマーズ・ハイ』（文藝春秋）を年末に読み、

先日は市立図書館で横山秀夫・吉村昭・山崎豊子の、いずれも単行本を借りて読んで、単行本もいいものだと思うようになった。年齢に応じて目が弱くなってきたのである。

それにしても、古典・名著といわれるものの読書量は少なく、通俗的な娯楽小説の類ばかり「気分転換」と称して読んできたことに忸怩たるものがある。

かつて、《自分の頭で考える》ことに拘って、数学の岡潔先生に、

「本は読まない方がいいのではないのでしょうか？」

と云ってしまったことがある。先生は静かに、「やはり名著は読むべきでしょう」

と諭された。傍らにあった先生の小さな書棚には文庫本が横向けにびっしり詰め込まれていたように記憶する。四十年ほど昔——私が若かった折りである。

混沌城

蒲原直樹

斯波大学考古学研究所の鶴岡秀子
助手にその「腐食金属」が手渡され
たのは秋の終わり頃だった。

「キミ、分析表書いてくれ」

「わたしは書くんですか？」

鶴岡秀子は驚いた。所長の松岡教授は重要な金属分析は必ず自分でやっていたからだ。それに教授の代わりなら助教や先輩男性助手もいる。なぜ下っ端の自分に仕事が回ってきたのか不思議だった。

「所長、どうか悪いんですか？」

「そうじゃない」所長は首を振った。

「今、ちょっと学会で忙しくてね。」

キミもそろそろ実践経験を積むころだ、教えた通りにやればうまくいく。やってみる」

「はい、わかりました、がんばってみます」

彼女はメガネの弦を持ち上げながら緊張気味に応えた。

数日後、興奮した顔で鶴岡秀子が所長室に駆け込んだ。

「所長、これを見てください」

彼女が見せた分析表と診断結果に

松岡教授は渋い顔をした。

「鎌倉時代の砂鉄？……少なくとも

室町時代の刀剣の破片……」

喜んでくれるだろうと思っていた

鶴岡は、教授の暗い表情に驚いた。

「間違いないのかね、測定値は確かか？」

「間違いない……と思います。先輩たちにも見てもらいました、大きな誤差はないはずです」

「そうか……室町時代ね……」

意外な所長の反応にがっかりしながら鶴岡は聞いた。

「これ、どこから出土したものなんですか？データを完成させたいんですけど」

「それは気にしなくていい、ボクが

記載しておく。ご苦労さん」

「……ありがとうございます」

鶴岡は釈然としない気持ちで所長室を出て行った。

また数日して研究所に人が訪ねて

きた。頭の薄い、垢抜けない背広を

着た六十過ぎの男性だった。研究所

はちょうど出払っていたので鶴岡が

対応した。

「先日、こちらに発掘品の鑑定依頼

がありましたか？」

「発掘品ですか？」

「私が掘り出したものです。古い刀

剣だと思ったのですが……」

「それはどこの遺跡なんですか？」

「混沌城です」

「混沌城？」

男は混沌市の元教師で、リタイア

後にボランティアで混沌市教育委員

会の活動を手伝っているということ

だった。

「市東部の再開発で、工場跡地が発

掘されることになったのです。私は

前からそこが幻の混沌城の城跡では

ないかとらんでいました。ですから志願して発掘作業に加わったのです」

開発主体のゼネコン集団はメガロポリスの新たなベッドタウンとすべく、巨大団地建設を計画していた。

工期の遅れは利権のうまみを損ねる。発掘調査は早期打ち切りをせまられた。業者は埋蔵文化財保護法の限界

ぎりぎりまで圧力をかけてくる。市長

や議会にも巨額の献金が回っていた。

元教師は焦った。しかし発掘開始二

週間後になっても大規模な遺跡は出

てこない。掘割は出たが、弥生時代の

環濠集落の跡ではないかと判断され

た。それならこのへんでは珍しく

ない。

「炭素層はあったのです。かなり大

きい木造建築物が燃えたという事実

は確認されましたが、肝心の石積み

や刀剣類が出てこない。諦めかけた

とき、刀剣の破片らしい金属を見つ

けました。これが中世の刀剣と認定

されれば、もっと深く大規模に掘ることが出来ます。その鑑定は、県からこちらの研究室に依頼されたはずなんです。しかしいつまで経っても結果が出てこない。握りつぶされたのではないかと心配になりまして……」

「まさか……」
鶴岡秀子は驚き、湧き上がる疑問に宙を見つめた。

県北部地域で中世に大きな城があったのは国府が置かれた吉川市の国府台と、それに向かい合う形で松葉宿の丘陵地に建設された松葉城だ。どちらかをを敵対する軍勢が占拠してにらみあい、合戦したという記録も残っている。数次にわたる「国府台合戦」である。だが放牧場であった混沌市に城があったという記録は残っていない。

7
正式な記録はないが、古老の話ではまだ足賀沼の干拓が大規模には行われていなかった時代に沼を運河に使い、屋根川と湾を使って関東の物資を集積した拠点が混沌市の東部にあったという。それが混沌城である。古い言い伝えではそれは巨船を陸に上げたような形の城だったらしい。

中世よりはるかに古い超古代の洪水伝説・巨船伝説との関連も指摘できる話である。

歴史のある松葉市・丸子市に強いコンプレックスを抱えてきた新興都市・混沌市民は、唯一といってもいいこの歴史伝説に強いこだわりを持つのだ、そんなことを元教師は熱く語った。鶴岡秀子も彼の熱意に感染し、幻の混沌城に関心を持った。

鶴岡は所長に問いただす必要を感じたが、教授は関西出張で三日間は帰らない。携帯電話もどういわけか留守電になっていた。鶴岡は先に大学経理部に聞き込みを入れた。すると問題の企業体から億単位の寄付金が入っていることが分かった。考古学研究室の帳簿を開くとそこにも数千万円の補助金が入っていた。(これが原因か……) 鶴岡は苦々しくその数字を見つめた。

教授の帰りを待つ三日目、新聞の片隅に事故死の記事が出た。鶴岡はその名前を見て驚いた。泥酔して側溝に転落し、凍死したという人物は先日考古学教室で名刺を貰った元教師のものと同じだった。彼女はすぐに名刺の番号に電話した。家人が出て事故死したのが本人であることを

確認した。鶴岡の背中に冷たいものが走った。

夕刻、所長が帰ってきた。彼がコートを脱ぐより早く鶴岡秀子が駆け寄った。

「所長、あんなの、考古学の自殺行為ですよ！」

所長はとまどったような、恥ずかしそうな顔をした。

「わたしが間違っただけだとかいう結論を出すのを期待したんですよ……」

「……そしてバレたらみんなわたしの責任にして誤魔化すつもりだったんでしょ？」

「……キミは優秀な助手だったよ、失礼した」

所長は悪びれずに応えた。

「しかしこれはボクの決定ではない。理事会からの指示なんだ。この研究室だけではなく、大学そのものの存亡がかかっているんだ。ス波大の借金総額を知っているだろう？」

「……」

「債権者銀行グループがその半額を棒引きするというんだ。私に抵抗できるわけがない、しよせん我々はサラーマンなんだ、権力機構の前には蚊に等しい」

「……でも、人が死んでいるんです

よ」

「え？」教授は閉じていた目を開いた。

「鉄剣を発見した先生が事故死したんです。その状況がすごく怪しくて、私には殺されたとは思えません」

「そんなことが……」教授は絶句した。

「なんてこった、キミも危険だぞ、この件にはもう立ち入るな」

教授は鶴岡を振り切るように所長のドアを開けた。そしてドアを開ける前に叫んだ。

「我々はなにも知らなかった、内外ともに一切の発言を禁止する。破ったらクビだ、いいね」

粉雪の舞う年明け、鶴岡秀子は混沌東部団地開発現場を望む高台にいた。巨大なクレーンが林立して空を覆い、その足下を無数のダンプカーが走り回っていた。自分は敗北し、混沌城は永遠にコンクリートの下に埋められる。悔しさよりも悲しさが先に来た。彼女はその足で元教師の家に立ち寄り、いぶかる家人の前で遺影に焼香した。いつの日にかの復讐を誓いながら。

遙かなる戦火

内田幸彦

(一) 戦時中の発明品

困ると考え、窮地から脱しようとするのんびんだらりと平穩に過ごせると、あまり考えないし、努力もしなくなる。人間は生来怠け者かも知れない。

食物はない、衣料も着たきり雀、諸々の物資も買えない。こうなれば考え、何とか乗り切る他ない。小さく狭い日本には資源がないのに、人口が増え、仕事もなく、ツイ侵略ということになった。

金属類は銃弾その他の兵器に化け、一九四二年（昭和17）中頃には鍋・釜まで、穴が空いたらモウ買えない時代になり、いろんな発明品や代用品が考案された。

米の代わりに配給されるメリケン粉や、トウモロコシ粉を焼くパン焼き器が現れた。底の深い矩形の木箱の両側にブリキ板が貼ってあり、電流を流すと膨れあがり、こんがり焼ける。わずかに三〇センチの大きさのブリキ板も手に

入らないから、空き缶を切って使った。

一九四四年（昭和19）、いよいよ煙草も配給になった。男子一人につき6本の割合で、女性には配給されなかったと思う。男女同権の現代なら大変なことになるだろうが、当時の女性はまだ従順だったから問題も起こらなかった。

配給の煙草は「刻（きざ）み」（煙管で吸う日本的なもの）と「巻き」の二種類あったが、どちらが当たろうと文句は言えない時代だった。うっかり文句を言おうものなら、配給を止められる恐れがあった。お金で物を買えない時代だから、物を持っている者が圧倒的に強かった。

時には巻き煙草がバラで配給されることがあった。誰が考えたのか、間もなく煙草巻き器が現れた。筆の柄状の竹一本の中央に、幅一五センチ位の和紙の端を貼り、反対側の端を板に固定する。インディアン紙がある訳がない。当時は英語は敵国語で使用禁止になっていたか

ら、英和の辞書を切って代用した。糊はないので、飯粒を潰して使った。和紙の中央に辞書の用紙を置き、刻み煙草を乗せ、筆の柄を巻きながら前方へ押すと巻き煙草が出来る。最初は慣れず、芋虫のようなふざまな煙草が出来る。

米搗き機は、それ以前に出来ていた。空いた一升瓶に六分目位まで米を入れ、磨き砂を少々混ぜ、竹の棒で何度も上下に搗く。すると、黒い玄米の薄皮がむけて白米が出来る。

「遊んでるなら、お米を搗いて」と、よく母にやられた。

いざとなれば、どんな事をしても生きて行ける。苦難に遭う毎にいろんな経験をして強くなり、成長して行く。昔の人は、

《苦労は買うてもせよ》
と、教えている。

当時は連日のように空襲に見舞われ、空腹と闘い、ボロ服を着て兵器の生産に従事し、夜は夜で毎夜の燈火管制。電灯の灯を洩らしては爆撃の目標になるので、小さな電球をつけ、入口・窓・ガラス障子を被った。息の詰まるような陰気な夜が数年も続いた。

あの時代に較べて、今は豊かな生活、全く自由な世の中なのに、当時のような生き甲斐も誇りもない。結構過ぎるせいだ。あの時代は苦しかったが、今になると楽しい思い出に変わっている。

歳月は何もかも押し流し、葬ってしまった。君のため、国のためと歯をくいしばって頑張った昔の生活は二度とゴメンだ。それにもかかわらず、今となっては楽しい思い出である。精一杯頑張った満足感であろうか。

中井君と出会った頃 (三) 滝本文彦

哲学書の方は、ニーチェは分
らず、ショーペンハウエルに共感
する所があった。カントやヘーゲ
ルは皆目分からなかった。

絵画では、その頃の僕はセザン
ヌの渋い色彩や構図に強い魅力
を感じていた。確固とした存在感
あり、何度見ても飽きない絵だと
思った。中井君にその話をする
と、セザンヌは科学的だと否定的な返
事だった。

彼は点描主義のスーラの作品に
好感を抱いていたようだ。スーラ
の絵は、画面全体が細かい点々で
出来上がっている。その根気に彼
は感心していた。スーラの『グラ
ンドジャット島の日曜日の午後』
を見て、僕も制作に要した時間と
集中力に感心したが、このポワン
ティリズムこそ色彩の科学ではな
いか、と思った。

ある日、長編小説に挑戦してみ
ようと思い、ロマン・ロランの『ジ
ヤン・クリストフ』を読み始めた。

二週間位かけて読んだと思う。最
初に読んだ長編小説だ。どこまで
理解できたか、どこまで深く読め
たか怪しいが、読み終えた満足感
は今でも思い出す。もう一度読ん
でみようと思っている。

その後、アンデルセンの『即興
詩人』を読んで胸が熱くなった記
憶も甦る。これも中井君の影響が
なければ読まなかったと思う。

ドストエフスキーの作品を理解
するには聖書を読まなければなら
ないようだ、と中井君は言った。
佐藤先生から聞いたそうだ。それ
で又、僕はドストエフスキーの小
説を買いに本屋へ走った『貧しき
人びと』と『罪と罰』を買った。

『貧しき人びと』は、往復書簡

の形式をとる。社会の底辺に住む
薄幸の乙女ワレンカと、五十歳
に手が届こうという小役人マカー
ル・ジェーヴシキンの不幸な恋の
物語が心に沁みた。この小説の背
後にもキリストの愛があるのだろ
うか。

『罪と罰』はショッキングだっ
た。のめり込んだ僕はラスコーリ
ニコフと一緒に苦しみだ。
政治的なこと、哲学的なことは分
からなかったが。

ある早朝、目を覚ますと、僕の
寝ている三畳の部屋に彼が鞆を持
って座っていた。僕が目覚めるの
を待っていたことに驚いた。高校
三年生の終わり頃だったか、ちょ
っと寒い日だったように思う。親
しい友達になれたのだな、と嬉し
く思った。その頃、友達がいなか
ったからだ。しかし、変わった生
徒だな、とも思った。

数学の定理を発見して佐藤先生
に送ったことを彼から聞いた。学
校の教科書からはみ出した所で真
剣に数学に取り組んでいるのだな、
と思った。しばらくして、既にギ

リシャ時代に知られていただろう
という返事が来たらしい。僕はそ
れを聞いてガツカリすると同時に
可笑しかった。

中井君が僕にいった言葉が今も
耳について離れない。

——君が作曲をするのだった
ら、音楽学者になれる程、あらゆる
音楽に関する理論を勉強し、あ
らゆる楽曲を分析し、研究しなけ
ればならない。音楽学者になるべ
きた。

中井君と高校時代に付き合った
ことは僕に大きな影響を与えた。
これ程まで影響を受けた人には以
後も出会っていない。が、彼には
マイナスになった面が多かったの
ではないかと思うことがある。

僕は彼の期待に応えられず、未
だに初歩的な所に留まっている。
ピアノも初歩のままだ。申し訳な
く恥ずかしい。歳をとったが、こ
れからが勝負と思ひ、少しずつで
も期待に応えるべく勉強を続けて
ゆこうと思っている。

(おわり)

おれたちの村

十二

蒲原ユミニ子

12 見つけたっ！

天高く、山が五色にそまってきた。

きょうは秋の全校遠足である。全校といつても、100人ちよつとだけれど、1年生からじゅんじゅんに長い列になつて歩いていく。

陽平はわくわくしてびよんびよんはねながら歩いていく。リュックの中のおにぎりやおやつが楽しみだが、教室の中で勉強しないですむのが一番うれしい。「陽平さん、前の人をおいこさないでね」

後ろから桜田先生に注意される。「はい！」といつて、陽平はおとなしく後ろにもどる。

桜田先生はプロの登山家みたいにニツカ・ポツカーをはき、リュックも古びている。中に、ナイフやのこぎり・ロープなどの七つ道具が入っている。出発前にちよつと見せてくれた。桜田先生は山登りが好きで学生時代によく登っていたらしい。

もつともこれから行く山はふつうの山道でジーパンや体育用のジャージをはいている先生もいる。

校長先生は布の帽子をかぶり、年季が

入つて動きやすそうな作業服を着ている。

列はどんだん山の中へ入っていく。

山道はコンクリートとちがってやわらかく歩き心地いい。足が自然に前に出る。

圭子たちはテレビのコマーシャルソングを歌いながら歩いている。男子はふざけながら枝をむしったりしながら進んでいく。

陽平たちの村は、今どきめずらしくまだ村のまま町や市に合併していない。有名な温泉があるおかげらしい。陽平の母ちゃんもそこで働いている。隣りの大きな市まで車で3時間かかるが、その分自然がゆたかである。

澄んだ空に赤や黄色に色づいた枝が映える。遠くの山々は淡いうす紫色にそまつている。この村は山紫水明の言葉がびつたりだ。

とちゅう、5・6人のおじさんたちが仕事をしていた。

植林とかではなく、道具を使って地形を測量している。陽平は、ずっと前のこ

とを思い出した。ムサシと聞いた山村のじいさまの息子たちの話だ。山にゴルフ場とか乗馬コースを作るらしい。陽平がムサシと行った山はきょうの遠足コースとまったく方角が違うけれど、おじさんたちはすごく大きな話をしていたからこの辺も入るのかもしれない。

村の人たちの口にもその話がのぼるようになっていた。陽平のお母さんはいつもいそがしくて、「宿題、すんだ？」しか言わないけれど。

陽平は、そうそうこのごろムサシと遊んでないなあと思いだし、「こんど、こちのコースにも来てみよう」と思った。

景色のいいところで弁当を食べ、おやつも食べ終わった。

いよいよ、遊び時間だ！
桜田先生が太い藤のつるにからまつているアケビに感動している。

「あら、絵になるわねえ。食べてもいいしいし」

と、さっそく七つ道具のナイフを取り出した。陽平はアケビのつるを引っ張り切りやすいようにしてやった。桜田先生がすばつと切り取り、満足して笑った。

「ありがとね、陽平さん」

陽平もいい気持ちになり遊びに行こうとした。その時、藤づるの向こうに野ウサギの姿が見えた。後足で立ちあがり、きよんとした目でこちらを見ている。まだ小さい。坂はなだらかだ。陽平はとつさに、(あいつをつかまえよう)と思つた。

それを察したかのように、野ウサギはしりをふりびよんびよん逃げ始めた。陽平はすばやく追う。

おどろいたことに、泉が後ろにくつついて来た。

「どこへ行くの？」

陽平はそつと教えた。

「野ウサギをつかまえるんだ」

泉はきよるきよるした。

「いないじゃあないか」

陽平が泉にふり返っている間に、こげ茶色の姿は見えなくなつてしまった。でも、陽平は自信ありげに言った。

「あの岩かげの方へいったんだ。まだ子ウサギだから、そんなに遠くには行けないよ」

陽平はどんだん雑木林をおりていく。泉もついていく。みんなの音が遠ざかる。

少し平らなところへ出た。立ち木もあるが、ぼうぼうとした枯れかかった草原だ。陽平はわしわしと突き進んでいく。こういうところは慣れていない泉がだ

いぶはなれて、おっかなびっくりついて行く。

とつぜん、

「ああつ」

という声を残し、陽平の姿が急に消えた。泉はびっくりして立ち止まりきよるきよる見まわす。

「うわあうい」

下の方から陽平の悲鳴が聞こえる。用心深く泉が少し進んでみると、入りくんだ崖になっていて、陽平はそこに落ちたようだ。

泉は自分も落ちちゃわないように、四つんばいになって崖をのぞきこんだ。

陽平がとちゅうの木に引っかかっていた。自分でよじ登ってもどつてこれるような状況ではない。岩だらけだし、5・6メートルはある。

でも、引っかかっただけましである。下はずうと深くどうなっているか見えない。泉はさげんだ。

11 「ちゃんとしがみついているんだよ、先生、呼んで来るから！」

「ほうい」

陽平のたよらない声もどつてきた。泉は急いだ。ふだんあまり歩いたことのない山坂を猛スピードで駆けあがった。

た。

のんきに山ぶどうの味見をしている桜田先生を見つけるなり、さげんだ。「陽平君ががけに落ちちゃった！」

木に引っかかっていた陽平は、不安定に垂れ下がっていた格好からなんとか枝に足をからませることができた。

けれど、こんな不自然なかつこうでどのくらい持つだろう。助けが来る前に、力がつきたらそれこそアウトである。陽平はこわいので、下を見ないで空を見た。広すぎるくらい広くてきれいだ。

それから、自分でよじ登れないかなあと思ひ、崖をよく見た。ところどころ木の根が張っている。岩のくぼみもある。プロのロッククライマーなら上がれるかも知れないなあと思ひながら、少しはなれたくぼみに目を吸いつけられた。

卵が2つ見える！

鳥の巣だ。すごいものを見つけたぞ！陽平はわくわくしてきた。無事もどれたら、こんどムサシや泉とロープや道具を持ってきて卵を採りにこようかなあと思つた。

ふと、陽平は遠くの空から一直線にやつて来るものに気がついた。それが何ものかわかったとき、陽平はぞくぞくとした。

それはムサシといつしよに見た中型の猛禽類だった。ものすごい恐い目で陽

平に迫ってくる。あんな鋭いくちばしで引きさかれたられたら終わりだ！陽平は思わず目をつむり、心の中でさげんだ。

(おまえの卵はとらないよ！)

そこへ、ワアワアと声がしてきた。

「陽平さあん」

と呼ぶ声もする。こわい目を開けると、腹ばいになってのぞきこんでいる桜田先生の顔がとびこんできた。猛禽類の姿は消えていた。

校長先生も顔を出し、落ちついた声で話しかけた。

「陽平くん、今から藤づるをおろすので、それにつかまりなさい。わしたちがひっぱりあげる。陽平くんなら、必ず上がつてくれる力があるからね」

陽平はその言葉でぐんと元気がわいてきた。

「オッケー」

くにやりと曲がつた藤づるがおりてきた。

陽平は体のバランスをくずさないように、まず右手からつかまつた。次に左手。

すると、校長先生が言った。

「よし、いいぞ。少し引つぱるからな」

30センチほど上がったところで、陽平は足も藤づるにからませた。

「いいぞ、いいぞ！」

みんながんばれ！」

ヨイッショツ！

ヨイッショツ！

かけ声と共に陽平はずりつずりつと上にあがつていく。

10分後には、陽平は大地をふみしめていた。

桜田先生が、涙をふりとばして土だらけの陽平を抱きしめてきた。そばで、泉も顔をまつ赤にさせている。髪どももゴムもどこかに吹き飛び、髪がざんばらになつて女の子のように見える。

つるを引つぱりあげてくれたのは5人の先生で、かけ声をかけてくれたのは6ねんせいだった。5年生以下の下級生はきていない。

校長先生は安堵の顔で陽平を見ると、叱らないで、

「よくがんばったな」

と言ひ、片手で肩をとんとんしてくれた。陽平は急に力が抜け、よろつとした。すかさず、泉が陽平と肩を組んできた。やつと陽平に心の底からうれしさがこみあげてきた。

(命のおんじんがきちちゃった・・・)

ヒカル君の冒険 9

藤川博樹

戦い

相撲や、プロレス、ボクシングのまねごとをして、ヒカル君とお父さんは家の中で暴れまわった。ヒカル君は剣が好きで、木でできた剣を振り回した。お兄ちゃんが昔、日光の遠足で買ってきたもので、おもちゃ箱の中にころがっていた。剣の先で目をケガしたりしたら大変なので、お父さんはいつも机の裏などに隠しておいた。お父さんが男の子というのは不思議だと思

うのは、ヒカル君がいつのまにか剣を見つけて出してしまうことだ。お父さんが気づくと、部屋の真ん中に剣がころがっていた。ヒカル君は、戦いのテレビも好きだ。ジェットマンとバイラムの戦いでは、悪いやつらが仲間割れして、ラディゲとトランザが自分こそが親分だといってゆずらない。トランザがジェットマンに倒されたとき、ラディゲがやってきて、倒れたトランザの手の甲に剣を突き刺し、「トランザ、おれの名前を言ってみろ」と命令する。トランザが「ラディゲ！」と叫ぶと、「なんだと！」と言ってラディゲがぐりぐりと剣をトランザの甲にねじ込む。たまらず、トランザが「ラディゲさま！」と叫ぶと、「そうだがお前を殺しはしない、お前は生きて一生おれの名前を恐れるのだ」と言って、トランザを生かしたまま廃人同様にし、置き去りにして去っていく。

ヒカル君は、お父さんと剣を持って戦い、お父さんの上に馬乗りになって、お父さんが「助けてくれ」というと、「おれの名前を言ってみろ」と言う。お父さんがふざけて「びかる」と言う、「なんだと、おれの名前を言ってみろ」と木剣をお父さんの手の甲にぐりぐりねじ込んだ。「うわー、びかるー」とお父さんが叫ぶと、「なんだと、もう一度言ってみろ」とさらに剣をねじ込んだ。お父さんがたまらず「ヒカルさま」と叫ぶと、ヒカル君はふふふと笑い、「そうだころしはしない」と言って、「おまえはおれのなをおそののだ……」と、もごもごうちのなかでいいながら、小さい背中を見せとお父さんから去っていく。このセリフは三歳のヒカル君には少し難しいのだ。

お父さんは、昔読んだ「銀の匙」という小説の中で、主人公がおばさんと剣で戦うシーンにいたく感銘を受けていた。心の中では、ヒカル君と戦うときにはいつもその小説のシーンをまねしていた。激しい剣での戦いの末、ヒカル君がお父さんを組み伏せて勝ち名乗りをあげる。お父さんは、倒れ伏した地面の上から、「縄は許せ、首を取れ」と言った。ヒカル君はセリフの深い意味はわからなかったが、「ぎーこ、ぎーこ」と言って、木剣でお父さんの首を切るまねをした。その場面をみて、お母さんは「いやだね」と眉をしかめた。

お父さんはこの「銀の匙」という小説が大好きで、そのなかでも、幼児である主人公と向き合っていて、はてしなくあそび続けるお婆さんの姿に感動したものだ。そして、こどもと向き合っていて夢中になってあそぶことで、とても大切なものを自分も得られたような気がしたんだ。